なつたんだからね。決して皆なが邪推してるやうに僕に悪意があつたのぢやないよ。あれは去年の秋のことで、雨が降つてた晩だつたが……」

と、その馴染めの様子を話さうとしかけたので、香取は耳を澄ましたが、湯原は急に心變りして、「そんな話も馬鹿々々しいね」と話を外した。

そして暫くして、「僕は今の女房と關係してた當座は、決して夫婦になる氣ぢやなかつたんだよ。それが相手があんな風だつたから、何時までも離れられなくなつちやつたが、今になつてつく〳〵後悔するよ。いつそあの時分に思切つて少し手荒なことをやつとけばよかつたんだが、僕はどうも不人情なことの出來ん性分だから困るよ」

「ぢや、これまで貴下の方から女に未練を殘したことはないんですか。何時も女に付纏はれてたんですか」

「何時もつて、僕に付纏つた女は嗅より外にありやしない」と、湯原は生

眞面目に答へた。そして、酒屋の店先から聲を掛けて、直ぐに例の奴を屆けて呉れと命じた。

隱れ家の門を入ると、香取は遠慮して少し離れてゐたが、湯原は縁側から上つて、「今日はお前の好きな人を連れて來たよ」と笑つて、自分で火鉢や座蒲團を眞中へ持つて來て座をつくつて、「君は其處へ坐りたまへ」と、突立つてゐる香取を指招いだ。

お多代は輕く挨拶して、「上野町へ入しつたんですか」と、不思議さうに二人を見くらべて訊いたが、その顏にも部屋の様子にも、香取が豫期してゐたやうな異狀は些しもなかつた。

「今日は緩くり香取君と飲むんだから、主婦に相談して何か取つて來て呉れ」

湯原はかう云ひながら、火鉢に炭を盛つて胡坐を掻いて、落着いて煙草

を吸出したが、ふと何か思出して、次の間へお多代の後を追つて行つた。襖の間から後姿を見せて、ヒソ〳〵立話をした。やがて女を宥めるやうに云つてゐたが、女は「では勝手におしなさい」と、最後に傍へ聞えるやうに云つて、臺所の戸を開けた。不機嫌な顔をして門を出て行くのが座敷から見えた。

でも、湯原はニコ〳〵して座敷へ戻つて、「我儘ばかり云つてやがある」と、呟いて、「これで僕一人で來ると、時々煩いことを云はれて困るんだが、今日は君が來て呉れて丁度よかつた。久振りて氣樂に飲めるよ。僕の家の方が君も氣が置けなくつていゝだらう」と、左右を顧ながら、獨り悦に入つた。

そして、其處へ茶を入れて來た主婦を側へ引据ゑて、香取を自分の腹心の子分でゞもあるやうに吹聽して、「この人も女に掛けちや却々隅に置けな

いんだよ」などゝ、次第に浮ついて、ゴールデンバットの臭い烟の中で、洒落を云つたり、主婦を冷かしたりし出した。

その不斷と異つた燥ぎ振を、香取は珍しさうに見てゐたが、次第に見苦しさに堪へられなくなつた。と、日頃お多代を相手に湯原がこの部屋で戯れてゐる有樣が、いろ〳〵に想像され出して、じ、つとしてゐられぬ程に淺間しさ、忌らしさに心が震へた。湯原の骨太い毛の濃い手首や、濁つた白目や、身體中から蒸發してゐる人間らしい臭氣が、毒々しく胸に迫つて來た。

あらゆる醜い者を寄集めて人間の身體がつくられてゐるやうに思はれた。かうして色戀に浮れて孕ませて、同じやうな醜い者を殖して行く……

ふと夢を醒すやうに戸の音がして、お多代の姿が次の室に見えた。

「早い事にして頂きたいね。喉が鳴つてるんだぜ」と、湯原は調子づいて云

つて、側にゐる主婦にも手傳ひを頼んだ。

が、騒ぎ立つほどの御馳走もなかつた。剝げかゝつた一閑張の食卓には、刺身の外に菜葉の茹でたのや佃煮が並べてあるばかりだつた。でも、湯原は悦さうに猪口を取つて香取にも差した。「お前は此處に坐つてお酌をしなくちゃいけないよ」と、稍もすれば次の室へ避けたさうにするお多代を引留ては、二人に酌をさせた。

「僕はもういゝんです」と、香取は二三杯飲んでから、猪口を押退て、手を振ると、

「では、もうお止しなさい。お酒なんか召上らん方がいゝんですよ」と、女は柔く云つて、「何時までも飲んでる人、私大嫌ひ！」と、眉を蹙めた。

「さう悪く云ひなさるな。まあ氣持よく飲まして呉れ」と云ひながら、湯原はへら笑ひをして、「散々おれに心配させやがつて。好きな酒ぐらゐ默

つてゝも飲まして呉れたつて罰は當らないぜ」

「ふゝん」と、女は冷笑して、無愛相に酌をして、「心配々々つて、そんなに心配が自慢なの、貴下は男らしいからね」

「まあ待つて呉れ」と、湯原は滑稽な手付をして押留めて、「人前だから、今日だけはおれの棚卸しは止して呉れ。酒の肴にするにや、お前の口説は些し鹽が辛過ぎるよ」

「人前だと、和泉町の義姉さんの前でゞも誰の前でゞも、縮上つてるんでせう」

「其處は男の智慧だね。男つて者は世間があるから、さう無法なことは出來ないさ。信用が大事だからな」と、湯原は香取の方を覗いて、「ねえ君、さうだらう」

「えゝ」

香取には二人の言合つてゐる意味が分らなかつたが、機嫌を取るやうな男の言葉を、女が押潰すやうにしてゐるのが小氣味がよかつた。湯原の手に持つた猪口からは、滴が垂てゐる。

「大した信用だわね」と、お多代は口元に微笑を湛へながら、横へ向いて獨言のやうに云つた。

その拗ねた素振を湯原は宥めかねて、手酌で續飲みをし出した。て、暫く部屋の中には聲が消えてゐたが、そこへ主婦が銚子の代りを持つて來て座の白けてゐるのを見ると、取做し顔に、「お熱いのを一つ」と、皆なに酌をした。

「主婦も一杯おやりよ」と、湯原は急に勢付いて、「飲食には人數の多いほどがいゝよ。主婦だつて枯木も山の賑ひと云ふからね」と、口輕に云つた。

主婦は湯原の相手になるほど賑かな口は利けなかつたが、酒は可成り飲

める方らしく、辭退しながら杯の數を重ねて、肥つた頰を赤くした。そして、隣の官吏の老人の嫁苛めの噂をしてゐると、お多代は話の間にそつと茶の室へ入つて、襖を締めてしまつた。

「僕はもう歸りませう」

先きから居づらくなつてゐた香取は最早辛抱し切れなくなつて、立上つた。

「あんまり早いぢやないか」と云つて、湯原は今まで忘れてゐた香取に目を付けたが、強ひて引留めやうとはしなかつた。そして、緣側まで送つて出て、「今日も君の家で遊んでることにしとくから、そのつもりて」と耳打した。

香取は霜融てべたつく庭を急いで横切つた。門を出ると、酒臭い唾を吐きながら鼻紙で下駄の泥を拭つてゐた。すると、ふと、後に足音がして靜

かに門が開いた。怖い者でも見るやうに、そつと首を捩向けると、目に愛嬌を湛へた多代が、明るい日光の中に浮出てゐた。

「僕に用事があるんですか」と、香取は聲を潜めて思はず周圍を見た。

「其處までお送りしませう。醉拂ひに取合つてゝも詰らないから」と云つて、女は自分から男を誘ふやうにして表通りへ出て、「あんな家に一日じつとしてると氣が腐つちやつてよ。何處へでも行つて、清々した氣分になつて見たい」と、温い町を遠く目を据ゑて見た。

「だけど、湯原君を放散かしてちや惡いでせう。斷つて來たんですか」

「それはいゝんですの。私晩まで何處かへ行つてゐたいんですけど」

さう云ひながら、男の側に隨いて來た。香取は相手の顏をも見ないやうにして、暫く默つて歩いてゐたが、女の下駄の音や衣服の擦れる音が、心を唆かすやうに耳に響いて來た。それを避るやうに、思はず狹い横道へ曲

つたが、女の足音は矢張隨いて來た。て、何時まで默つてゐられなくて、

「あれからどうしてたんです？」と、訊く氣もないのに訊いた。そして、女が何か答へてゐる間に、左右の二階家を見上げながら、其所に一緒に上つて行つて、あの日の差した窓際に二人差向ひで坐る……その手順を空想してゐた。

ふと目を下へ移すと、女は柔かい肩から懶さうに手を垂れて、重たげに首を傾げてゐた。想ひなしか今日は帶のあたりが膨れてゐるやうに見えたが、それが香取の心を女から背かせないで、却つて手強い刺激となつて、次第にジタバタする思ひをさせた。

「あゝ、こんな所まで來ちやつた」と呟いて、女は不安らしく今來た道を顧みて、

「何處まで行つても仕方がありませんわね。私もう歸りますわ」と立留まつた。

香取も立留まつて、何か云はうとしたが、思つてゐることが喉に絡まつて言葉に現せなかつた。女は男から何か利益になる事手頼になる事を云はれるのを待設けながら、

「歸つてまた厭なことを聞されて……」と、獨言のやうに云つて、「貴下ずつとお家へお歸りなさるの」

「えゝ、外に行く所もないから」

「私貴下に聞いて頂きたいことがどつさりあるんだけど、今日は染々お話も出來ませんわね。でも近にまた來て下さるでせう」と云つて、女は重ねて念を押して、「では左樣なら」と、目に力を入れて男の顔を見てから元の道へ歸つた。

何のために此處まで見送つて來たのやら、女の心持が香取には分らなかつた。が、それはどうあらうと、二人が人目の煩さい都の中で歩いたり話したりしてゐるのが窮屈に感ぜられた。其處等に動いてゐる樣々の人間や、目に見えぬ知人の顏や、明るい日光までも、自分の自由を妨げた者、幸福を奪つた者として、憎々しかつた。

都が荒野になつて、世界が闇だつたら……彼れの今の歴え難い慾望はその外になかつた。

で、彼れは抵悟かしい思ひをして、賑かな町を心寂しく通つてゐたが、やがて「やまと」の格子戸を開けた。

此家の二階にも日が斜めに差込んでゐた。窪地を隔てゝ、高臺の西洋館が木の葉の間に白く見えて、淡い烟が靜かに漂うてゐる。

「もう直ぐお正月ですわね」と、女中は前に坐ると云つた。

それには答へないで、「此處は却々眺望がいゝんだね。僕は今日初めて見るんだよ」と、香取は障子の隙間から、向うの烟の舞上つては消えるのを見てゐた。

「今日は温かですわね」と、女中も男の見てゐる方へ目を向けてゐたが、暫く立つても男は身動きもせねば、言葉も掛けないので、「どうなさいます。直ぐ電話を掛けますか」と催促した。

「さうだねえ」と、香取はふと氣付いて此方向いて、「誰れか外の奴を呼ばうかね」と云つて、小菊では物足らぬ思ひがしたが、ふと、先日鎌倉まで連れて行つたのに、あれきりで外の女に移るのは愚なやうな氣もしたので、矢張その女をと命じた。

「直ぐだよ」と、後から急立てる聲を聞いて、女中は階下へ下りたが、間もなく上つて來て、「お正午前から出てるんですつて？。何處だか出先を云はないんですけど」

「ぢや、些し待つてゝもいゝから、早く來る樣に云つといてお呉れよ」香取はさうなると外の女を呼ぶ氣はしなくなつた。が、暫く待つてゐても、何の音信もなかつた。

「出先さへ分つてれば、當人に話をするんですけど、幾ら訊いても、あの家で出先を敎へて呉れないんですよ」女中は二三度電話口へ寄つて嚴しい口を利いた後で、二階へ上つて來て言譯をして、「もつとお待ちなさいますか。それとも今日だけ外ので御辛抱なさいますか」と、冷淡に訊いた。

「いや、今日はあの女でなくちやいけないよ」と、香取は生眞面目になつて、どうしても呼んで來るやうに女中に言付けた。

例にない執着を女中は不思議がつて階下へ行つた。香取は再び高臺に舞上る烟を夢のやうに眺めてゐたが、その中時間は餘程過ぎたらしく、日光

は障子の下へ沈んで、隙間から染込む風は薄寒くなつた。で、障子を締めて、所在なげに寢ころんで、疲れた目を閉ぢてゐたが、すると、姙婦の身體が世にまたとない懐しい者のやうに現はれて、自分の唇が其處へ吸寄せられるやうだつた。

と、誰だか側にゐて自分の樂い空想を覗いてゐるやうな氣がして、そつと薄目に開けて見ると、部屋の中には人影はなくて、煙草の吸殼のみが燻ぶつてゐた。で、また目を閉ぢると、そこへ女中がアタフタ階子段を上つて來て、

「今歸つたつて電話が掛りましたよ。今度こそ間違ひはありませんよ」と、やう〳〵安心したやうに云つた。

「今までどんな家へ藥罐込で稼いでたんだらう」と云つて、香取は身を起じて、今迄の空想から心を移さうとつとめた。

電氣を點けて、火鉢にも添炭して、食卓を拭つて、茶を入變へて、望みの食物を伺つて、女中は階下へ下りた。晝間は殺風景だつた部屋の中が、何となく色めいて來たのを見ると、香取も唄でも聽きたいやうな浮いた氣持になつた。そして自分に心を許した女を待受けてゐるやうで、階下の物音に耳を付けてゐた。

が、間違ひのない小菊の聲のしたのは、障子の外も夜になつて、高臺の西洋館が薄黑く聳えて見える時分だつた。隣の部屋にも客が來て、女中を相手に馴染の藝者の噂をしてゐた。

「こんなにお待せして、何だか極りが惡いわね」と云つて、小菊は襖の側で躊躇してから這入つて來た。

今まで何處へ行つてゐたのか冷かしてやらうと思ひながら、その顏を見ると、香取は相手を厭がらせるやうな酷い事が云へなくなつて、「僕はまだ

飯を食べないで待つてたんだぜ」と云て、女懐しい心の中を素直に自分の目顔に出して終つた。

「さう。本當に濟みませんでしたわね。私氣になつて〳〵二三度此家へ電話を掛けたんですけど、どうしたんだか、些とも通じないんですよ」

「……目の縁が紅くなつてるね」と、香取は不斷よりも女の顔を美しく見ながら「酒を飲んだのかい」

「え、私自棄になつて飲んぢやつたの、……だつて焦燥つたくて仕樣がないんですもの」と、女は急に無理酒に惱んでるやうな口付をした。

「今夜僕はどうしても一人でゐられないんだから、長くゐるよ。家へさう斷つてお置き。外から呼びに來ないやうに」と云つて、香取はせめて今宵はこの女を人手に渡さぬやうにと思つてゐた。

「私そのつもりで來たのよ。貴下と分つてれば、家から呼に來る氣遣ひはないわ」

女は相手が些しも氣拙ひ思ひをしてゐないのに安心して、馴々しく旅行後の事を訊いたり、年末に迫つたこの頃の色町の樣子を話したりした。香取は話の中味よりも、聞馴れた柔い聲を喜んで、いゝ加減な返事をしながら、茫然聞惚れてゐた。そして、言葉が切れると、

「もつと何か話してゝお呉れ。お前の話聲が切れると、外の事が考へられていけないから」と促して、「話がなくなつたら、三味線でも彈いてお聽かせよ」

「貴下何か唄つて？」

「僕は何も知らないよ。僕は幾ら遊んでも唄なんか唄はうつて氣持になつたことがないから。……他人の唄つてるのを聽いても些とも分らないんだよ。だけどお前のだけは聽いて見たい氣がする。一心に聽いてるのだか

ら、何でも好きな者を彈いて御覽……」

女は望まれる儘に三味線を引寄せて、調子を合せながら、「貴下も唄つて騷いてたら氣が晴れるんですよ」

「さうかねえ。ぢや敎てお呉れよ。お前の後に隨いて僕も唄つて見るから」

「え、さうして御覽なさい」

女は都々一のやうな者を二つ三つ唄ひながら、男の口元の幽かに動くのを見詰めてゐた。が、何時まで立つても聲が少しも漏れて來ないので、張合がなくて、撥を持つた手を下へ置いて、「一人で唄つても詰らないわね」と、三味線を後へ押退けやうとした。

「もつと彈いといで。かうやつてればいいんだから」と、香取は强ひて女に唄はせて、矢張小首を振りながら唇を尖らせ、蚊のやうな聲で眞似をしてゐたが、やがて、ふと女が笑出した。

「どうした？。何が可笑いんだい」香取は目を張つて不思議がつた。

「だつて、貴下の樣子が可笑いんですもの」と、女は聲を出してます〳〵笑つた。

「何故？。そんなに僕が滑稽に見えるかね」と、香取は俯目になつた自分の身體を見廻した。そして、自分の身に附いてつひ忘れてゐたとが、急に思出される樣だつた。

「そんな所ぢやないのよ。貴下が唄つてる時の樣子が可笑いのよ。こんなに顏ばかり振つて」と、女は目を細くして態とお道化て首を振つて、男の眞似をして見せた。が、その樣子は香取の目にはさして嫌らしくはなかつた。むしろ愛くるしかつた。で、

「僕に鏡をお見せよ」と、手を伸ばして女の懷鏡を取上げて、自分の顏を映しながら、生眞面目に今女のしたやうな身振をして見た。

「成程嫌らしいね」
「何して入つしやるの」と、其處へ入つて來た女中は、それを見て笑つた。
「此方はね、御自分の顔に見惚れてるのよ。唄ひつ振が乙だつて」と、小菊は面白さうに説明した。
香取は鏡を投出して、「男の顔つて醜いものだね。僕は暫く自分の顔を染〻見たことがなかつたが」と、苦笑して皮膚の强張つた女中の顔を見詰めながら、「でも女の目には男の顔がよく見えるんかね。お前なんかよく客の顔付に目をつけてるんだが、男の顔をどう思つてる？」
「さあ、どうですかね。私達はお顔の鑑別は不得手ですから一向分りませんですよ。これで商賣柄藝者衆の姿のよし惡しなら、道で擦違つても直ぐ目につきますけど、殿方のお顔はどうだつても構はないんですからね。入しつて下さる方を皆樣美男子に思つてるんですよ」

女中は笑ひながら戯談らしく云つて、小菊に向つて、「でも、隨分酷い美男子もあるわね。松香さんなのあの人」と云ひかけて、下唇を反らせて、その客の顔付を眞似て、「あの人は些とも此家へ來なくなつたのよ。何處か外の家へ行つてるのか知ら」
「さうでせう。……でも、松香さん時々あの人のことを惚けてるのよ。あんな口してる人が情が深いんだつてね」
香取は知人の顔を思浮べながら、彼等がそれ〴〵に女に愛せられてゐるらしいのを不思議に思つて、「僕は男が女に惚れる譯は分つてるが、女が男に惚れる譯は分らないよ……でも女も男に惚れるんだね」
「それは當前でさあね。ですけど私なら顔で男に惚れやうとは思ひませんね」
「私だつてさうよ」

て、女二人は色戀の話に興が乘つたやうに、互ひに勝手な事を喋舌り合つてゐた。それが眞心の聲であつてもなくつても、香取は只部屋の中が色つぽい言葉で賑はうのを喜んで、時々感心したやうな相槌を打ちながら、耳を傾けてゐたが、やがて女中が階下へ行くと、ふと夢から醒めたように、眞顏になつて、

「妙なものだね。何と云ふことなしにお前とも懇意になつたね」と、自分なから不思議に思つて、「しかし、僕はもうお前に會へんかも知れないよ」

「何故？。遠方へでも入つしやるの？」

「……僕は呑氣に藝者遊びなんかしてゐられる身分ぢやないんだよ。初めからお前にだつて分つてたらう」

問詰められるので、女は「そんなことはないわ」と、曖昧に答へて、「……偶あに入つしやることも出來なくつて？」

「あゝ。僕のやうな者でも、もつと生きてゐなくちやならないからね。かうしてると、頭が輕くなつて下らない心配を忘れてるけれど、これが癖になつて毎日此家へ來たくなつても困るからね。だから今夜切りと思つて、お前も外の事を忘れて、勢一杯僕を大事にして呉れよ。これで心殘りのしないと云ふぐらゐにして貰ひたいね。僕は只の一度だつて女に可愛がられた例がないんだから情ないよ。男としてせめて一日でも、好きな女に可愛がつて貰ひたいがな」

さう云ひながら、香取は過古を顧みて自分のまだ經驗しない强い快樂が其處に潜んでゐるやうに思つた。あの女も物足なかつた。あの時分にも物足なかつた。

(十五)

て、彼れは長い夜を快く眠る間もなく過して、翌朝霜の融けた時分に寢床を離れた。久振りに市街の中で朝を迎へたので、階下を通る物賣の聲や、賑かな足音や、人聲が珍らしかつた。日當りのいゝ障子際に怠い身體を寄掛けて、側に坐つてゐる女の顏を見てゐると、思切つて淋い自分の家へ歸る氣にはなれなかつた。朝餐を食べてからも、さして話もないのに、半時間一時間と時を延した。

「かうしてゝも詰らないから、何處かへ遊びに行きませう」女は怠屈して、下町の年末の模樣を見に行くやうに誘つた。

「僕は畳間藝者を連れて東京の市街を歩く氣にはなれないよ」と、香取は飽くまで斥けた。「お前は此處にゐたくなくなつたら、何時でもお歸りよ。さうしたら仕樣事なしに僕も出て行くだらうから」と、自分を持扱ひかねたや

うに云つて、身動きもしなかつた。そして、只女が自分の側を離れないでゐて呉れゝばと念じてゐたが、女は相手をしてゐるのに困じ果てたのか、やがて、「では私お湯に入つて來るわ。直ぐ來ますから待つて入つしやい」と、息抜きに立つて行つた。

て、暫く一人ぼつちで目を瞑つてゐた。すると、このまゝ暗い谷底へ落ちて行きさうで心が戰いた。目を開けると、明るい障子に自分一人の影が佗しさうに差してゐる。誰れか側にゐて懷しい聲が催眠歌でも唄つて、快く眠らせて呉れたらばと思つてゐると、其處へ女中が樣子を見に來て、お愛相を言出した。

香取は此部屋に倦んで、「帳場へ行つてゐちや惡いかね」と、出抜けに云つて、「あの女はもう來なくつてもいゝから、斷つてお呉れ。そして日が暮れたら、お前と寄席へでも行かうぢやないか」と、急に思付いて、懷つこく云つた。

「えゝ、寄席ならお伴したいわね。だけど小菊さんも連れて入しつた方がいゝてせう。後で知れると悪いから」

「いや、あの女と一緒だと、今夜また歸れなくなるから、お前だけの方がいゝよ」と云つて、女中が微かに笑つてゐるのを見て、「何も惚れてるからさうなんぢやないよ。只大勢で出て行つて、僕だけ獨り家へ歸るのが厭なんだよ」と言譯した。

そして、女中に隨いて帳場へ下りて行つて、長火鉢の前の厚い座蒲團に坐つた。主婦は買物に出てゐて、可愛らしい娘が顏に不似合な甲高い聲で喋舌りながら、忙しさうに周圍をうろ〳〵してゐた。お歳暮と書いた紙包が幾つか片隅に重なつてゐて、其側には大きな厚ぼつたい羽子板が立てゐる。鏈帷子を着た百日鬘の凛々しい男が大な目を開けて睨んでゐる。「誰れだらう、あれは」と香取は訊いたが、聞えないのか、煩がつてか、側に返

事がなかつた。で、彼れは自分の記憶を索りながら、羽二重の似顏を見詰めてゐた。さま〳〵の舞臺と役者の顏とが浮んでは消えた。と、その芝居の土間の中に、自分が一人悄然坐つてゐる樣が今見えるやうだつた。そして、あの芝居を今一度觀たいと、華やかな世界を忍ぶ氣もしなかつた。

最早一生芝居の木戸口を潜らなくても遺憾はない……凡ての感覺の死んでしまつてゐるやうに、世の樂みに些しの未練もなかつた……兄弟であれ友人であれ、誰れにも會ひたくもなければ、その動靜を知りたくもなかつた。世の凡ての男には些しの執着をも持つてゐないのに、何故女に對してのみ愛着の念が絶えないのだらう？。

「お怠屈樣……もうお風呂が沸きますよ」と、云つて、女中は臺所の方へ消えた。玄關には客の來たらしい氣色がした。

燈火が點いて、電話口で女の名前が呼立てられて、再び色めいた夜になるまで、香取は長火鉢の側を動かなかつた。と、二階からも筋向ひの料理屋からも、陽氣な三味線の音が聞えて來た。前の銅壺には酒の匂ひが舞上つて、娘は立膝で海苔を焙出した。

周圍が慌しく動搖してゐると、香取は自分が其處にじつとしてゐるのが邪魔になるやうに思はれたので、近所を一廻りして來ようと思立つて、家の者に斷らないで、そつと外へ出た。

人の目を惹くやうに派手に飾つた店先を見ながら、坂を下りてゐたが、昨日あの家へ入つてから餘程の日數を經てゐるやうな氣がして、賣出の提灯も今初めて目についたやうだつた。坂の左右に並んだ福壽草や萬兩の赤い實を見るにつけても、急に年の迫つてゐることが知られた。そして坂を下盡すと、元の道へ歸つて、「やまと」の前まで來たが、まだ忙しがつて

いるだらうと思ふと氣臆れがしたので、素通りした。

て、再び大通りへ出て、雜沓の中に入つてゐたが、ふと、留守の間の家の樣子を見て來る氣になつて、次第に人通りの薄らぐ方へ足を向けた。心細い思ひをして、町外れの暗い道に入つて行つた。家へ歸ると、何時ものやうに茶の間の障子に微かな燈火が映つてゐる。下女に何か訊くつもりでその障子を開けて覗くと、言葉を掛ける先に、水引のかゝつた紙包が目に付いた。

「誰れか來たのかい」と、彼れは急いで取上げて見た。「お歳暮、湯原」と、菓子折の上に拙い女文字で書いてある。

「上野町の奥樣が壹過から、夕方まで待つてゐなさつたんです。折角來たんだから、お目に掛つて行きたいつて、大變殘念がつてゐなさいました」

「別に用事がありそうぢやなかつたかね」

「いゝえ。そんな風にも見えませんでした。別段お言傳もありませんでした」

下女は恍けた返事のみして、要領を得なかつたが、香取は妻君の訪問が氣に掛り出した。下女と半日も話してゐる間に、どんな事を勘付いたかも知れない。不斷湯原が妻君の前で繕つてゐた事が破れたかも知れないと氣遣はれた。

が、何時も此方へ來ると云ふ口實をつくつては追分へ行つて居た湯原の秘密の皮の剝げるのは、香取の心に意地惡い興味を起させぬでもなかつた。て、彼は机の前に坐つてからも、心をその一點に凝して、事件の成行を今見るやうに描いてゐた。妻君の手を借りて湯原を苦めるのが、次第に小氣味よく感ぜられて、萎れてゐた身體が俄に勢ひづいた。

お多代がそのためにどれほど苦境に陷らうと、それはあまり念頭に浮ばなかつた。只湯原が氣樂さうにあの女と遊んでゐられなくなるのが、胸の透くやうに悅しかつた。

て、この新なる希望を見付けた彼れは、最早「やまと」の女中を連れて、寄席などへ行く氣はしなくなつた。

(十六)

紅く龜かんだ手で傘を差して、吹付ける雨を冒して、香取は和泉町の戶田の家へ急いだ。その朝の葉書を見て、俄に思ひ立つたのである。

葉書には妻君の名前で、いろ〳〵話したいことがあるから、年内に一度來て呉れ、前以て知らせて呉れゝば御馳走して待つてゐると書いてあつたが、彼れは早くその話を聞きたいやうな氣がして、出拔けに訪ねて行つた。

妻君の注意で、濡れた衣服を脱いで、主人のに着替へて、瀟洒した座敷で、新しい桐の火鉢に寄掛ゝつて、切髪の老婆と向合つてゐると、心が改まつて、何となくゆつたりした氣分になれた。「去年も今時分伺ひましたね。江戸のお正月の話を老婆に聞きましてね」と、あの時の光景を懷しさうに顧る氣にもなつた。

「また一つ年齢を取ります。何時までも婆婆塞げをして。まだ業が盡きませんですか知ら」と云つて老婆は笑つた。

そこへ座に加はつた妻君も、豫期してゐる話を持出しはしないで、暫く年末の景氣や、明けてからの計畫を話の種にしてゐた。香取は此方から訊出さうと思ひながら、折角柔いてゐる自分の心を、妻君の話次第で、亂さねばならぬのが恐ろしかつた。て、時刻を延し〳〵してゐたが、やがて、ふと

「貴下にお目に掛けたい人があるんですがね」と、妻君が云つた。「今日入つしやると分つてれば、此家へ呼んで置くんでしたのに……寫眞でもあるといゝんだけど」

「誰れのことです」香取は氣付かぬ風をしてゐたが、妻君の言葉の意味は略分つてゐた。そして、當が外れたやうだつた。

「いゝ事なんですよ。私一人で極めてゐるんですけど、ぢや、春になつてお話しませう」と、妻君は些つと句はせたばかりて、話を引込めて、老婆と謎見たやうなことを言合つてゐた。

香取はその事には興もなくて、冷かに聞流してゐたが、稍あつて、上野町の噂を引出さうとして、「先日湯原君の妻君が私の留守に訪ねて來ましたよ」と知せた。

「へえ……。此方へは暫く來ませんですよ」

妻君の答へは案外だつた。そして「あの女も一時は騒立つて、始終私に泣言を聞かせてた癖に、少し落着くと滅多に顔も見せない」と、不平らしく云つた。

「さう云へばお多代さんは、この頃どうしてるんだらうね。矢張神戸へ行つてるのか知ら」と、老婆はそれを疑つてゐるらしい目付をした。

「どうだか分るものですか。あゝ云つた女は直ぐに情夫を拵へるんだから、まだ東京にうろ〳〵してるんでせうよ。私ちやんとさう睨んでますの。それに夏時分から外に情夫があるらしいと、私一人で思つてたのですがね。どうも素振がさうらしかつたんですよ」妻君は眞實しやかに云つて、香取の方を見て、「でも、こんな事は上野町へ入しつても話さないやうにして下さい。東京にゐると知つたら、夫婦ともいゝ氣持はしますまいから」

「えゝ」香取は探つたい思ひをした。そして、人間の所行の案外他人に分

らないのを不思議がつた。ては湯原は何時までもあゝして、秘密の快樂に耽つてゐられるのだらうかと心の中に嫉ましかつた。

「東京は廣いから何をしてゝも分らないんですね」と云ふと、

「さうですとも」と、妻君は言葉に力を入れた。

他人の素振に氣をつけて、有る事無い事尾に尾をつけて仰山に吹聽したがる妻君さへ、些しも湯原の秘密を嗅付けてゐないらしいのが、齒痒くてならなかつた。平生の態度から押して、この人ばかりは勘付いてゐることと思つてゐたのに、こんな重大な事件をさへ見逃してゐるとなると、相手の顔が白痴らしく見えた。

て、香取は雨を冒して態々此家まで來た甲斐のなかつたのを悔いてゐたが、でも、容易に暇を告げやうとはしないで、午餐の御馳走にもなつて、平和な話を左右から聞かされながら、愚圖々々してゐた。妻君は春まで延

すと云つた事を隠し了せないて、自分て樂むやうにチラ〳〵微見かせて相手の意向を索出した。

「決して貴下の爲にならんやうなことはしませんから、大人しく私の云ふことをお聞きなさい。間違ひの起らない中に、極める者は早く極めた方がいゝんてすよ」と、親切な口を利いて、「この頃はお家にばかり入つしやるんてすか」と、意味ありげに訊いた。

「えゝ。今年一杯は保養するつもりて、何處へも出なかつたんてすが、來年からはまた働かなきや食へないんてす」香取は明年後の自分を信じかねて、とても悠長な人並の結婚など思ひも染めないて、「私なんかにお世話なすつちや、貴女が迷惑なさるばかりてすよ」と、少しも話に乘りさうな風を見せなかつた。

「そんな事があるものてすか。……どんな人だつて相當の年齢になれば、

結婚してるぢやありませんか。一人よりも二人の方が仕事にも身が入つて、結句氣樂に暮せるんてすよ。それに貴下抔は些とも將來の御心配がないぢやありませんか」

「さう思はれますかね」香取はまじ〳〵妻君の顔を見ながら、さも凡ての人間の代表者に向つてゐるやうな氣になつて、「しかし、私が何を考へてるか、今に何をし出すか分らないてせう。私自身にだつて、自分がどうなるんだか分らんくらゐてすもの」

「何故てす？。貴下がそんな事を仰有やつてた日にや、世間に心配のない人つたらありやしない」

「だから、僕は不斷不思議に思つてゐます。」香取は此處ぞと云つた風に自ら力を入れて「よく皆な平氣て生てられるものてすね。僕は人中へ出ないて家にじつとしてゝも、戰慄するやうなことがあるのに、よく世間の

人は平氣でそれ〳〵勤めをしてゐられるんですね。」
「それは、仕方がありませんさ。いくら厭やだつて、稼がなければ生てられませんからね。貴下のやうに半年も一年も遊んでゐられる樣な御身分なら結構だけど」
「僕だつてもう駄目だ。せめてもの手頼にしてた金ももう無なつたんです」
「お遊びなすつたの。だからお一人だといけないんですよ」
「別に遊んだつて譯ぢやないんです。」
香取は辯護するやうに言掛けたが、ふと氣付いて、こんな人と眞面目腐つた話をしてゐるのが愚しくなつて、口を噤んで、只相手の云ふがまゝにまかせて置いて、自分は勝手な空想に耽つてゐた。
て、妻君の話は煩はしい雜音に化してしまつたが、まだ降頻つてゐる雨の中へ飛出して、何處へ行くのかと思ふと、溫かいこの部屋を離れるのにも躊躇された

(十七)

春になつたら、お知らせするから、その日に是非遊びに來て下さい。歌留多でも取りますからと、歸り際に妻君は外の意味を含めて云つた。香取は妻君がそれほどに自分を信用してゐるのを怪みながら、承知して戸外へ出た。
そして、次手だから、上野町へも寄つて行かうと思つて、お歳暮の返禮に味付海苔を買つて、その方へ足を向けたが、その家の前まで來ると、ふと足を留めた。湯原は最早勤先から歸つてゐて、何か賑かに話してゐる。その間に妻君の聲も幽かに聞えた。

すると不快な秘密に包まれた二人の中へ分入つて、空々しい話をして、兎もすれば湯原に利用されねばならぬのが、厭な氣がされて、どうしても入る氣になれなかつた。差向ひの夫婦の顔が障子越しにまざ〳〵と見えるやうだつた。

て、逃げるやうに後返りして、寒さに身を縮めながら、刻足で電車道まで出た。そして、無駄になつた手土産の處分をつける口實を考へて、追分の方へ足を運んだが、世の中の無事平和に過ぎるのが合點が行かなかつた。

湯原の家庭も何時までも穩かなやうだ。お多代も湯原を厭つてゐながら、何時までもキツパリした處置をつけやうとはしない。厭らしい塊と思はれる胎兒は無事に育つてゐるらしい。……て、彼れは二三ヶ月前に湯原に訪ねられてから、亂れ出した自分の心は、湯原が死に、胎兒が死に、あるひはお多代が死なゝければとても平和は得られない樣に思はれた。

いつそ生きたお多代は無くつてもいゝ。湯原に汚され得るお多代はなくつてもいゝ。厭やらしい塊に人らしい形を具へさせるお多代はなくつてもいゝ。さうなれば、自然に自分の心も穩かに輕くなるかも知れない。……あの女も自分を思つてゐたのだと云ふ懷しい思ひ出だけを殘して、外の女に心が傾いて行くかも知れない。……女自身にしても、どうせ將來に望みがないとすれば、一日も早く湯原の目をのがれ、惡運の手をのがれて死んでしまう方がましだ。……痛々しい樣子を傍の人に見せないだけでもいゝ。……

香取は果しない苦痛の種が其處にあるやうな氣がして、自分の手で湯原を殺し胎兒を殺し、果てはお多代をも殺したらと、我知らず恐しいやうな樂いやうな空想に沈んだ。さうすれば世界が晴れ〳〵しくなつて、自分も生れ變つたやうになれさうだつた。心を腐らせてゐる毒氣が消えてしまひ

さうに思はれた……白く光つてゐる匕首や厭らしい塊から流出る悪血がありゝと胸に浮んだ。……

ふと後から怒鳴るやうな聲が耳に入つたので、彼は驚いて、左右を顧た。網引の俥が袂を掠めて、泥を跳掛て行過ぎた。

先日湯原が立寄つた酒屋は直ぐ側に見えた。

「こんな鬱陶しい日に、どうして暮らしてゐるだらう？」彼れは足を早め出した。

手土産を投出して、龜んだ手を溫めながら、香取は針を持つたお多代の手の動くのを見てゐた。女は火影に横顔を見せて俯首いたまゝ、その手を休めなかつた。

「貴下のお家ぢや、もうお正月のお仕度が出來て？」

「……僕はこの衣服でお正月だ」

「……春著をお拵へなさいな。私が見立てゝ上げますから。此家で買へば安いんですよ」

「えゝ」

「……お正月には貴下方は何をしてお遊びなさるの」

こんな事が途切れ〳〵に話された。女の言葉も顏付も穩かで、縫合はせた糸の跡を扱く音にも、穩かな心が現はれてゐるやうだつた。香取もかうしてゐれば、焦立つた心が柔かい手の平で撫でられてゐるやうなので、何時までもこのまゝでゐたかつた。互ひに痛い感じを惹起すやうな言葉を口にしないで、二人の座をも亂したくなかつた。正面に女の顏を見ないで、その指先や衿足を見ながら、恋に空想に耽つてゐる方が樂しかつた。

「これだけ片付けますから、もう一寸待つて下さい、ね」と、女は目を上げ

て子供らしい口を利いて、更に仕事に取懸つた

戸外には雨足が衰へて、軒の雫も長閑に落ちてゐた。火鉢に掛けた湯沸からは盛んに湯氣を吹出した。香取は自分で茶を入れて、溫い雫を腸に染込ませながら、お愛相に女の話掛ける話に、輕い返事を與へてゐたが、女はやがて、ホッと息を吐いて、周圍を片付けて、火鉢の側ににじり寄つて、冷い手を翳した。そして、「お待遠様」と云ひたさうに媚を含んだ目を動かして。

「今年ももう四五日ですわね。何處も忙しさうでせう。私些とも市街へ出て見ないんですけど」

「……僕は今朝から和泉町へ行つてたんです。彼家はもうお正月らしかつた」

香取は話の種を造らうと思つて、何氣なくかう云ふと、

「どんなでした？彼家は」と、女は力を入れて問返した。

何と答へていゝかと、香取は迷つて、暫く口を噤んでゐたが、女は目を放さないで、

「私のことを何か云つてたでせう。屹度」と、答へを迫つた。

「いや、そんな話は些ともしませんよ。何も知らないんでせう」

「さう？……只遊びに入しつたの」

女はまだ不安らしかつた。て、香取はそれを打消して、自分が何も口外しなかつたことをも確めさうとして、

「彼處の伯母さんが僕に女房を持たせやうと思つてるんです。用事があると云ふから行つて見たら、その話なんです」

「ぢや、いゝお話だつたんですね」と、女は微笑して、「貴下の奥様は何な方だらう。私の知つてる人ぢやないんでせうね」

「どんな女だか……どうせあの伯母が見つけたんだから、碌なんぢやないでせう」

香取はこの話に深入りしたくなくて、揉消さうとしたが、女は興がつて、最早極つてゐることにして、何かと頻りに訊出した。「早くお貰ひなさいな、あんまり選好みすると却つてよくないのよ」と、眞顏で勸めたりした。

香取は自分の結婚について、女が少しも心を惱ましてゐないらしいのを、飽氣なく思つた。

そして、今夜は女が浮々して、さも境遇に安んじてゐるらしいのを訝つて、また湯原に言ひくろめられたのではないかと疑ひながら、「あの後湯原君は何か云つてましたか、此間僕が此方へ來てゐた留守の間に、妻君が僕の家へ來たさうですよ」と云つた。

女はドキッとして顏色を變へたが、直ぐに冷笑を浮べて、「どうにでも勝

手にするがいゝさ」と呟いた。そして、横へ向いて、唇を嚙んで暫く默つてゐた。その血相が怖いやうなので、香取は自分の言葉を悔いて、相手を宥めやうとして、

「僕はあの妻君に些とも會はないんですよ。久振りに今日寄つて見ようと思つて、門口まで行つたんだけど、厭になつて引返しちやつた。湯原君も大きな聲で面白さうに話をしてゐて、また醉拂つてるらしかつたから、擾まつちや大變だと思つて、逃げて歸つたんです」と、勢ひづいて云つた。

「面白さうな話つて、どんな話をしてました？」と、女は厳い目付をして慌だしく訊いた。

「甚麼話だか、よく聞なかつたんです」

「聞いて入つしやればいゝのに」

女は詰るやうにかう云つて、何か考へてゐたが、軈て打解けた笑ひを見

せて、「どんな事でも勝手に云はせとけばいゝわね」
「えゝ」香取は相手の言葉の意味は分りかねたが、只機嫌の直つたのが悦しかつた。て、媚るやうに、「僕もこの家へお歳暮をやらなくちゃ惡いでせうね、度々邪魔に來るんだから」と、云ふと、
「いゝんですよ、そんな御心配なさらなくつても」と、女は聲を潜めた。「私主婦が貴下の事をよく思ふようにしくと不斷氣をつけてますの。だから、些とも主婦に氣兼ねしなくつていゝのよ。……今夜も何時までゞも遊んで入つしやい。貴下さへ構はなきや、かうして夜明しゝたつていゝんですわ。主婦も宵つ張りだし、私も夜が更けると、寂くつて變なことばかり考へられるんだから、夜明しぐらゐ何でもないの」
「僕も徹夜ぐらゐは構はないけど……だけど、貴女は縫物が忙しいんでせう」

「いゝえ。どうせ御年始に行く家はないし、何時まで掛つたつて構ひませんわ……主婦にお茶菓子を買つて來て貰つて、皆なで面白いお話しませう」
女がいそ〳〵して次の間へ行た後で、香取は知らぬ間に煙草の煙で部屋の濁つてゐるに氣付いて、縁側の雨戸を開けた。雨は上つて名殘の滴が幽かに慄えてゐる。面に觸れる外の空氣は痛いほどに冷かつた。主婦が門の方へ出て行きながら、此方を顧みた目が、薄明に氣味惡く光つた。そして、その目が此方の心を見てゐるやうで、油斷のならない氣がした。と、不意に、
「貴下近くまた上野町へ入つしやるんでせう」と、後で聲がした。
て、振向いて、物思ひに凝つてゐる女の顔を見て、元の座へ戻ると、女は再び同じ事を訊いた。

「年内に一度は行かなくちや悪いかも知れない。……何か用事があるんですか」

「用事なんかあるものですか」と、忌々しさうに男の問を押潰して、眉を曇らせて思案してゐた。

「人間は遠慮して小くなつてちや駄目ね」女は思案の果にかう云つて、口元に憎を含んだ笑ひを微かに浮べて、「馬鹿にしてやがる」と呟いたが、やがて、男の顔に目を吸付けて、「ぢや貴下はこれから彼家や和泉町へ度々入つしやるんだわね。そして、此家へは來て下さらないんでせう」

「僕は成可く來ないやうにするつもりです。あの主婦が氣味が悪いから……貴女が此家を出て自由な身體になつてから訪ねて行かうと何時も思つてるんだけど、外へ出るたびに、つい此家へ足が向いて仕方がない」

香取が無邪氣らしく云ふと、女は快く微笑して、艶めいた目付をして、「貴

下が來て下さらないと、私本當の一人ぼつちよ。皆なから惡者にされて、味方になつて呉れる人は一人もないんですもの。まだしも此家の主婦は私の贔屓をして、いろんな口を利いて呉れるんですよ。初め思つたほど決して悪い人ぢやないの。だから、心配なさらないで、今夜宿つて入つしやい」

「だけど……」と、香取は決しかねた風をしたが、其處を拔出る力はなかつた。かうして女の息に包まれてゐると、これまで味ひ知らなかつた快感が沸きさうだつた。恐しいやうな度外れな快感を覺えてゐるやうだつた。逃けやうたつて手足は自由に利かなかつた。で、彼れは默つて其處に坐つてゐたが、女の髪の毛から爪先まで、彼れを刺激して、不自然な空想の色を刻々に濃くさせた。

と、其處へ主婦が歸つて來た。「外は寒いんですよ」と云つて入つて來たが、その目も鼻も、いくら思直さうとしても、香取の目には、意地惡さう

に見えた。自分の幸福を遮るやうに思はれてならなかつた。

「どうも御苦勞樣、主婦も此處へ入つしやい」と、女は陽氣に云つて、座を開けて招いた。

主婦は肥つた身體を二人の間に据ゑた。そして女同士の呑氣らしい話が夜の更けるまで續いた。

香取はついに歸るべき機會もなくて、勸められるまゝに、宿の主人の夜具にくるまつて、火鉢の側で假寢をせねばならなかつたが、その夜具には穢くろしい老爺の垢や、湯原の肌の脂が染付いてゐるやうな氣がして、安らかに身體を落付けることが出來なかつた。次の室からは主婦の寢息が、靜かな夜の空氣を破つてゐる。彼れは其息を押潰したかつた。……

夜明前から、女は深い眠に落ちた。香取は主婦が雨戸を開けるのを待つてそつと起上つて、襖の外から一言聲を掛けて顏も洗はないで戸外へ出た。

最早日は高くて、表は年末らしく賑つてゐた。

彼れは脇目も觸らず自分の家へ歸つた。机の上には昨日の朝の戸田の葉書がそのまゝに置かれてあつた。

「いろ〳〵お話申上げたきこと之有候へば……」この文句に心惹かれて出て行つたのだがと、彼れはあれから今朝までの事を跡を追つた。

すると、忌はしい記憶が叢つて來たが、不思議にもその底に背て覺えない傲が燦めいてゐた。命掛けの冒險をして、力强い者を打挫いたやうで、沈んでゐた心が急に魅力を帶びて來た。

で、彼れは毛布にくるまつて、長い間惱んでゐた心をも身體をも休めた。珍しく熟睡に陷つて、二三度下女に呼びかけられても目を開けなかつた。そして、名殘なく夢から醒めたのは、部屋の中が薄暗くなつ

てからだつた。

見ると、床の間には鏡餅が供られてあつた。三寶に大きな伊勢海老が垂れてゐる。茶の間の燈火も不斷よりは冴えてゐて、注連飾が其處に投出されてあつた。

「お次手に雑煮節を買つて來てお呉んなさい」と云つて、下女は獨り量見して春の準備をしてゐたことを知らせた。

「今夜福壽草でも買つて來ようかね。外に入るものがあれば何でもさう云つて御覽」と云つて、香取は下女から盆だの皿だのと、足らない世帶道具の名を訊いて、夕餐が濟むと、直ぐまた外へ出た。

そして、買物をしながら神樂坂まで出て、床屋へも入つた。ストーブに溫まつてから、髯を剃られながら、見るともなく自分の顔を見てゐたが、その顔はこれまでのやうに見苦しく萎びてはゐなかつた。目にも口にも彈力

があるやうに思はれた。傍の鏡に映つてゐる外の男の顔を見下げるやうな氣にもなつた。あんな並外れの快樂は誰れも知るまい……

其處へ入つて來た二三人の藝者の白い軟かい顔も鏡に映つた。知合らしい客を戯弄つたり戯弄はれたりし出した。と、小菊の顔までも思出されたが、そんな女の仇めいた言葉や甘つたるい言葉は、彼の心を少しも唆かしさうではなかつた。

て、「やまと」の近くまで歩いたが、最早その稀薄な空氣に興も起らなくて、引返して家へ歸つた。まだ雷の閉ぢた福壽草の鉢を床の間に置いて、机の前に落著いて、部屋の中を見廻すと、來る春には何か望みを含んでゐるやうだつた。寂しい陰氣な空氣は彼れの左右から遠ざかつた。……自分だけが他人に與へられない禁制の快樂の底へ藻繰込んでゐるやうで、知人が皆恐かしく見えた。最早明日からの生活の事などは、屈託する氣にはな

れなかつた。最早誰れにも氣臆れしないて、人中へ出て行かれる。お多代にさへも手强く物が云はれる……

彼れの顏には、憎い者の胸に刃を當てた時のやうな笑ひが微見えた。

「大晦日の晩には是非遊びに行きます、そのつもりて待つてゐて下さい」

と、その夜お多代に葉書を送つた。

そして、今年の最後の夜に彼所へ行つて、彼處て除夜の鐘を聞く有樣を濃い色取て芝居のやうに描きながら、眠に就いたが、ふと、あの主婦の斛を思起させた。

「どうも彼女の目が邪魔だ」。彼れはその目が自分の心を睨んてゐるやうに思はれて、次第に不安の念が萌した。て、夢の醒めるたびに不安が增して、果ては、主婦の前だけでは自分が萎縮けてゐるやうに思はれ出したので、その目を抉取りたくなつた。

(十八)

一日隔てゝ次の日は大晦日だつた。が、それまてにお多代から端書一つ來なかつた。「あの夜から餘程惱んでゐさうなものだが」と、訝りながら、一日を送つて、暮れるのを待つて追分へ急いだ。

庭から聲を掛けて障子を開けると、お多代の姿は見えなくつて、主婦が笑顏で快く迎へた。何か搜出すやうな目付をして部屋の中を見てゐると、

「今し方湯原さんと買物に出掛けました。直ぐ歸んなさるでせう」と云つたどけて、主婦は茶の室へ引込んだが、其處には珍しく主人の聲がしてゐた。

香取は一人火鉢の側て寢たり起きたりして、待つてゐた。二人が歸つて

來たらどんな風をしてどんな口を利くだらうかと豫想しながら、次第に心を興奮さしてゐた。そして、外の足音に耳を澄ませてゐたが、容易にそれらしい音はしなかつた。

時刻の經つほど、張詰めた香取の神經は疲れて、留度なく想像に浮かんで來る二人の言葉は素振が針の先のやうに痛く響いた。で、心を紛らすために、何か讀む者でもないかと、部屋の中を捜したが一枚の新聞すら見當たらなかつた。痛い針の先から逃げるやうに緣側へ出ると、星が目眩ろしく微動してゐる。通りの物音が呻くやうに聞えて來る。

と、やがて、下駄の音に交つて高い話聲が耳を驚かして、門の戸が開いた。

「やあ、君かい」と、湯原は近寄ると、不斷の通りの聲をした。明るい所へ入つて來て、風呂敷包を其處へ投出して、「切通しまで引張つて行かれたよ」

と、主婦に向つて襖越しに云つた。お多代は提げて來たよせ袋を置いて、穏かな微笑を浮べて挨拶した。香取はその目を羞明がつて避けるやうにして、

「貴下の家の用事は片付いたんですか」と、湯原の方を見た。

「今年も苦しい思ひをして、やうやく遣繰りをしたのさ。だけど先づ無事に年が越せるから、お目出度譯だね」と云つて、湯原はふと氣付いたやうに

「君に借りた者も拂はなくちやならないね。皆拂ふ譯にも行かないが」と、紙入を出して、考へながら、貸金の半分ばかりを前に置いた。香取はそれを受取つて、そつとお多代の方を見ると、女はよせ袋を開けて、中から鞠だの箸箱だのと色んな者の出て來るのを悦がつてゐた。

「子供騙し見たいなもんだね」と、湯原は手を伸して取上げて見た。

「でも、割にいゝのが當つたんですよ」と云つて、女は石鹸の箱を取つて、その臭ひを嗅いで、「これもさう惡くないの。見て御覽なさい」と、目の前に

出した。

湯原は一寸手に取つて、「これで何もかも揃つたね。……ぢや、これから皆なで年越蕎麥でも食べようぢやないか」

風呂敷の中には下駄もあつた。肩掛もあつた。お多代は暫く其等から心を放さなかつた。

香取には二人の間に何の異狀もないのが案外だつた。お多代は先日來に見なかつた平和な顏をしてゐる。蕎麥が來ると、主人も主婦も招かれて入つて來たが、誰れも此處に並んでゐる男女に對して、邪推の目を向けてはゐない。

その晴々しい世間話を聞てゐると、香取はふと、先日の夜自分だけ夢を見てゐたのではないかとも疑はれた。が、それが夢であらうとなからうと、かうして平凡な話を何時迄も聞かされてゐると、刻々に心が訶まれるやう

だつた。

「僕は歸らうかね」と呟くと、

「僕もも少しゝて歸るんだから、一緒に行かう」と、湯原は引留めた。

「香取さんは何時まで入しつてもいゝんでせう。また此間のやうに夜明しゝませう。元日のお祝ひして入つしやい」と云つて、お多代は湯原を流し目に見て、「歸るのなら、貴下だけお歸んなさい。大晦日に御主人が家にゐなくちや惡いんでせう」と、つけ〳〵云つて。そして、湯原が人のよさゝうに笑つてゐるのを見て「私明日お家や和泉町へ御年始に行つてもよくつて？」

「來られゝば來たつていゝさ」

「ぢや、行きますよ、吃度。私些とも構はないから」

「おれだつて構はないさ」

「ふゝん」と、お多代は幽かに冷笑を洩らして、勝ち傲つた顔付をした。

それが香取の目には凄かつた。男を悔つたやうな太々しい心の底が見えるやうだつた。自分をも憚つてゐないらしいのが憎くなつた。で、秘密を湯原の前で曝し出したらと思つてゐたが、湯原は女を宥め賺しながら、歸りさうにしては、また腰を据ゑた。

「貴下はもつと遊んで、下さいな、淋いから」と、女は香取の立上りさうにするのを見て、頼むやうに云つた。

「え、」と、香取は承知したが、此處に留まつてるのが、自分の身に危かしい氣がして、迷つてゐた。あの太々しい心や刺戟の強い肉感に、自分がへし潰されさうなのが恐ろしかつた。

「さあ一緒に行かう」と、湯原は何氣なく云つて、引立てるやうにして、戸外へ出た。外套の襟を立てゝ懐手をして、足早に歩みながら、「僕の家も

少し雲行が悪いんだからな。君も警戒しといて呉れたまへ。家の奴が君に會つたと、屹度何か訊出すから……」

「しかし、お多代さんは何時までもあゝして置くんですか。子供が出來ても……」と云掛けて、香取は厭らしいその影を浮べて口を噤んだ。

「仕方がないさ。僕もあゝして置いて時期を待つんさ」

香取はそれ以上に訊きやうもなかつた。電車道で別れて、當てもなく電車に乗つたが、「やまと」へでも行く外落著くところはなかつた。

で、其家の二階へ上つて、身體を投出してゐると、太々しいお多代の素振が、自分を取殺すやうに、目の先を離れなかつた。

明治四十五年五月十六日印刷
明治四十五年五月十九日發行

（實價金六十五錢）

著作者　東京市日本橋區通四丁目五番地　正宗忠夫

發行者　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　和田靜子

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　石川金太郎

印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話本局五一番）
（振替口座東京一六一七）　春陽堂

内に著作者の印鑑無き物は偽造品

現代文藝叢書

正宗白鳥氏著　（第十一版發賣）

第一編

泥人形

實價金貳拾五錢
郵税金四錢

早稻田文學論じて曰く

（前略）作者が自己の人生觀に對して、何等かの論理的解決を求めんとする氣分、若くは宗教的の何等かの理想を追及せんとする氣分が作物の全面に積極的に流動してゐる文藝と、作者は作物から遠く離れてゐて、現實をたゞ在るが儘に描いてゐる文藝と、此の孰れが文藝の上乘なものであるかと云ふ問題は、特に「泥人形」の一篇に依つて喚起された問題ではない。而して『泥人形』は寧ろその後者に屬す可きものであるから、「不徹底な心持を書いたものなら、も少しスケプチックな態度でかゝらなければなるまい」と云ふ議論の如きは、最初から此の種の文藝を觀るに色眼鏡を通して觀てゐる人の議論であつて、到底妥當な批判は下し得ないのである。成程此の作の中にも處々作者の主眼が露骨に顔を出してゐるやうな處も見えないこともない。例へば彼の非難者が引例した「つゝとめて何か云つて見ても心の融け合ふことは一度だつてなかつた」（本書八八頁）の如きはそれであるが、是れなぞは寧ろ作者が主人公の心持を說明せんとして誤つてその主觀を一寸と閃めかした、小さな技巧上の手ぬかり位と見る可く、假令斯くした個處が他にも二三あつたとしても、其れは決して全體が客觀的に描かれてゐることを打壞すことは出來ないのである。從つて此の作の價値は直にその背負つてゐる內容が、奈の位まで深く强くそして淸新な感銘を讀者に與へるかと云ふ處にあらねばならぬ。（後略）

269
383

269
383

094696−000−2

特11−586

毒

正宗　白鳥／著

M45
DBQ−2247